



Title	レッジョ・エミリアの幼児教育における教育空間 : アトリエを中心とした空間構成の形成と継承
Author(s)	西影, めぐみ
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 51-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

レッジョ・エミリアの幼児教育における教育空間 —— アトリエを中心とした空間構成の形成と継承

西 影 めぐみ

キーワード

レッジョ・エミリア・アプローチ, アトリエ, 空間デザイン,
幼児教育, アンビエンテ (環境)
Reggio Emilia Approach, Atelier, Space Design,
Early Childhood Education, Ambiente (Environment)

はじめに

1. レッジョ・エミリアの幼児教育とアトリエの成立
2. ディアーナ幼児学校の内部空間の形成
3. ニルデ・イオッティ乳幼児学校の内部空間の展開
4. 二つの事例に見る教育空間の継承

おわりに

はじめに

北イタリアの小都市レッジョ・エミリアで行われている幼児教育（レッジョ・エミリア・アプローチ）は、芸術的アプローチを取り入れた独自の実践により、国際的に注目を集めてきた。とりわけ市の全ての幼児学校に導入された「アトリエ」と呼ばれる芸術活動の空間は、子どもたちが多様な素材と表現技法を用いて探究的に活動する場であると同時に、教師や保護者といった大人が子どもの学びに寄り添い、共に思考する場として機能している¹。

こうしたレッジョ・エミリアの教育実践において、環境は「第三の教師」と称されるほど重視されている²。これは、各クラスに配置された二人の担任教師の次に重要な、あるいはそれと同等の存在として、環境そのものが子どもたちの学びや成長に深く関わっていることを示している。

これまで、アトリエでの教育実践や子どもの表現活動については、教育学・心理学分野を中心とした研究が多数見られる。しかし、アトリエを含む教育施設内部の空間構成や、その形成の過程と継承について、芸術学や建築デザインの観点から論じた研究は限られている。とくに、教育施設が未就学児を対象としているためにプライバシー保護の観点から詳細な調査が難しいこと、建築図面や内部資料の多くが非公開であること、さらにこれらの建築が外観

本稿は、第66回意匠学会大会（2024年8月22日、上田市交流文化芸術センター）での発表にもとづく。

上の意匠性によって高い評価を受けてきたわけではないことが、研究蓄積の少なさにつながっていると考えられる。唯一デザインの観点から論じた Guiomar Martín Domínguez (2024) の論文 “The Beauty of the Unusual”³ はレッジョ・エミリアの教育施設の空間全体の移り変わりを時系列で整理しているが、アトリエについての詳細な言及は行われていない。

本研究は、1970 年に開校したディアーナ幼児学校においてアトリエ空間がどのように配置され、それを取り巻く校舎の内部空間がどのように構成されるようになったかを、レッジョ・エミリアの教育関係者の文献をもとに読み解く。さらに、ディアーナ幼児学校で形成された校舎内部空間のモデルが 2003 年に開校した市の最も新しい新築校舎であるニルデ・イオッティ乳幼児学校においてどのように継承されているのかを考察する。そして、アトリエが子どもたちの創造的な活動を支える特別な空間から、レッジョ・エミリアの幼児教育の理念そのものへと変容したことを明らかにする。

1. レッジョ・エミリアの幼児教育とアトリエの成立

1-1. 教育の制度・理念

レッジョ・エミリアの幼児教育レッジョ・エミリア・アプローチは、市の自治体を中心に運営されており、乳幼児 0～6 歳を対象としている。その中で、0～3 歳を対象にした乳幼児保育所と 3～6 歳を対象とした幼児学校⁴に分かれている。現在ではさまざまな運営形態の市内乳幼児教育施設約 90 校がレッジョ・エミリア・アプローチを導入した教育を行っており、公立校は約 50 校ある⁵。

レッジョ・エミリアの幼児教育は、他の教育法、たとえばモンテッソーリ教育などとは異なり、基本的に教育カリキュラムや特定のメソッドを持たない。子どもたちと教師の日常的な対話により設定されたテーマに沿ってプロジェクト(プロジェクトツィオーネ *progettazione*)⁶が展開されていく。プロジェクトの事例には「モノとの対話」「場所との対話」「小鳥の遊園地」「劇場のカーテン」などがある。活動期間は定まっておらず、1 グループ 5～6 人の編成により、さまざまなテーマの活動が同時多発的に進められる。その過程をドキュメンテーションとして教師が映像、録音、ドローイングや文章などに記録するという流れとなっている。アトリエは、粘土や絵具、自然物、工業廃棄物などさまざまな「素材」⁷が置かれた、実験や探究の場として機能し、子どもたちが仮説を立て、試行錯誤を通じて表現を発展させる活動の拠点である。

レッジョ・エミリアの幼児教育施設では、年齢ごとにクラスが分けられ、一クラスに二人の担任教師が配置されている。さらに「アトリエリスタ」⁸とよばれる教師が各校に一人ずつ配属されている。アトリエリスタは専門学校や大学で芸術を専攻した経験を有した人物で、学

校全体の活動を見回りながら子どもや他の教師たちと対話を重ね、アトリエを中心とした活動をサポートしている。

1-2. 幼児教育の背景と「百の言葉」の理念

レッジョ・エミリアでは、第二次世界大戦前から自治体立幼児学校が存在していた⁹が、戦後の市民運動を経て新たな自治体立幼児教育が展開された。その過程で教育思想家ローリス・マラグッツィ（1920-1994）が参画し、地域主導の教育改革を推進した。

レッジョ・エミリアの幼児教育の理念を表すものとして、マラグッツィの『それでも百はある』¹⁰という詩があり、そこには「子どもは百から成る。子どもは百の言葉を持っている。」と記されている。これは、1970年代にイタリアで行われた子どもの権利にかんする議論をきっかけに生まれたとされている¹¹。その議論とは、文字言語と音声言語のみではなく、より多様な表現言語によって子どもたちが育まれるべきであるというものであった。子どもの多様な表現言語「百の言葉」を大切にしたい教育を目指したときに結びついたのが、新しい視点を持った人物を招くこと、そして多様な表現言語を学び探求する場を作ることであった。多様な表現言語を育むために多様な素材が必要であり、それらの素材が置かれた探求の場がアトリエであった。

1-3. アトリエとアトリエスタの導入

著者は先行研究「レッジョ・エミリアの幼児教育におけるアトリエの役割」¹²（2025）において、1960年代後半から1970年代初頭にかけてアトリエ空間がどのように誕生し、また「アトリエスタ」という独自の専門職がどのように生まれ制度化されたのかを、教育関係者や芸術教師の証言をもとに明らかにした。その経緯は以下のようにまとめられる。

1963年には、ローリス・マラグッツィを所長とした保育所（現在のロビンソン幼児学校）が戦後のイタリアで初めての公立の乳幼児教育施設として認められた。1960年代の教育関係者たちの対談記録によると、ロビンソン幼児学校や翌年建てられたアンナ・フランク幼児学校が開校した当初、アトリエという特別な空間はまだ存在していなかった。当時は、マラグッツィが自ら設計したイーゼルを日当たりのよい空間に置き、子どもたちがそこで自由に絵を描くようになったと1960年代に勤務していた教師たちが回想している¹³。この手作りのイーゼルと日当たりのよい空間がのちのアトリエの空間につながった。

レッジョ・エミリアの幼児教育において、アトリエという言葉は単なる芸術家の工房ではなく、19世紀フランスにおける近代芸術運動を指す¹⁴。若き芸術家たちが共に議論し新しい表現を試していった場、という意味のアトリエが、レッジョ・エミリアの幼児教育のアトリエ

の由来となった。この名付けには、子どもも大人も一緒になって研究するというレッジョ・エミリア・アプローチの姿勢が表れている。また、芸術教師は1960年代においては非正規のアシスタントスタッフであったが、1970年代以降、それまで女性しか採用しなかった幼児教育の現場に男性教師を採用し始めたことをきっかけに、アトリエから派生した「アトリエリスタ」という独自の名称が付けられた¹⁵。

1-4. 既存建築の校舎と新築校舎

現在レッジョ・エミリア市には約50校の公立幼児学校および乳幼児保育所が存在しているが、その多くは、既存の建物を再利用した校舎であり、新築であっても素朴な素材と簡素なデザインによる建築が主流であった。

1963年に初の公立幼児学校が開校して以降、1960年代には5校の幼児学校が開校された。たとえば1967年開校のヴィラ・チェッラ幼児学校（現在「4月25日」校と呼ばれる）は、戦後の市民運動によって設立された「市民の保育所」を前身としており、当初の校舎は1946年に建設された既存の建築物を再利用したものであった。

1970年代にはディアーナ幼児学校をはじめ、15校の幼児学校と11校の乳幼児保育所が新たに開校し、1980年代以降も学校数は増加した¹⁶。1990年代以降になると、トゥッリオ・ヅィーニら建築家の計画による新築で意匠性の高い校舎が計画され、2000年代に0～6歳児の一貫教育と結びついた乳幼児学校が実現した。そのうちの一つがニルデ・イオッティ乳幼児学校であった。ディアーナ開校からイオッティ開校まで30年の期間があるが、現在に至るまで学校の統廃合や改名が繰り返されており、全校舎の変遷を正確に把握するのは困難である。

そのため本論文では、アトリエの空間をはじめとしたレッジョ・エミリアの幼児教育の内部空間のデザインのモデルが形成されたディアーナ幼児学校と、アトリエやアトリエをとりまく空間が変化しながら継承された現在の状況の事例として最も新しい校舎であるニルデ・イオッティ乳幼児学校の二つの校舎に焦点を当てる。

2. ディアーナ幼児学校の内部空間の形成

2-1. ディアーナ幼児学校と内部空間のデザイン

ディアーナ幼児学校はレッジョ・エミリア市の中心部の公園内に位置する、レッジョ・エミリアの幼児教育を代表する学校である¹⁷（図1）。

教育指導者ローリス・マラグッツィはディアーナ幼児学校の開校に際し、当時モデナの中学校で美術教師をしていたヴェア・ヴェッキを招いた。ヴェッキはディアーナ幼児学校で30年間勤めた経歴を持つ、レッジョ・エミリアで最も著名なアトリエリスタであり、学校の内

部空間や環境にも芸術的な視点をもたらした。それはヴェッキが受けた芸術教育によるものだけではなく、子どもたちや他の教師たちとの対話や活動の中で徐々に生じたヴェッキ自身の環境の質への関心にも由来していた¹⁸。ヴェッキの夫であるトゥッリオ・ヅィーニが建築家であったことは、レッジョ・エミリアの幼児教育の教育空間の発展に大きく寄与した。1970年の時点ですでに校舎の建設が完了しており、ヅィーニは低予算のため無償で学校の内装や家具などの室内空間のデザインを担当し、子ども用のテーブル、椅子、戸棚、収納容器、アトリエとして計画されたエリアを仕切り防音するためのガラスの間仕切壁を設計した。ヴェッキによれば、これらは1960年代～1970年代のイタリア建築デザインの潮流である「ラディカル・デザイン」とも調和していた¹⁹。



図1 ディアーナ幼児学校外観

ディアーナの内部空間は、白を基調とし、床の格子状タイルやガラスの間仕切壁、そして室内の二つの中庭が特徴的である(図2)。透明なガラスの間仕切壁は室内と室外との連続性を生み出し、空間全体に明るく開放的な印象を与えている。これはイタリア合理主義建築の透明性やモンテッソーリ教育のオープンなガラスの間仕切を用いた室内環境を継承しているとも捉えられるが²⁰、とくに四方を格子状の組子によるガラスの開口部で囲われた二つの中庭(図3)を配置している点が、ラディカル・デザインの建築家集団「スーパースタジオ」の描いた自然環境の中のグリッド状透明構造物を想起させる²¹。



図2 エントランスから見た内観



図3 室内から見た中庭の風景

2-2. メタファーによる内部空間の名付け：ピアッツァとアトリエ

ディアーナ幼児学校が開校した1970年以降、建築家トゥッリオ・ヅィーニとアーティストの友人ニーノ・スクアルツィの指導により、学校の内部空間が子どもや大人によってどのように使われているか、1年にわたりその使用の質が調査された。これにより、学校の室内空間の再評価が可能になり、新しい環境、家具、設備、オブジェクトの設計につながった。すべての学校には、教室の大きさに合わせた複数の計画図が提供され、研究は子ども、教師、親の位置を異なる時間帯に記録し、それをフロアプランに異なる色でマークした。同時に、子どもたちの評価、音響、スペースの量、利用可能な家具などの指標を用いて、さまざまなス

ペースの使用の質を評価した²²。

ディアーナ幼児学校はミッロという人物²³によって設計された平屋建ての建築で、建設当初はほぼ正方形の平面であった。エントランスを入ると中心に共有スペースがあり、それに隣接するかたちで、各学年の教室（3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラス）、ダイニング、中庭、現在アトリエとして使われているスペースがあった（図4）。

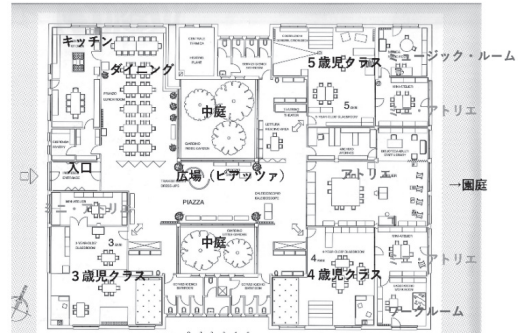


図4 ディアーナ幼児学校校舎の平面図

中央の共有スペースはホールを意味する「サローネ」と呼ばれていた。しかし、学校の内部空間の質の調査により、ここは単なるホールや廊下ではなく、人々が集う場のメタファーとして、「広場（ピアッツァ）」と名付けられた²⁴。ピアッツァはイタリアの伝統的な都市広場であり、街の中心部の教会や劇場に取り囲まれた空間で、人々が集ったり市場が開かれたりする場所である。この時、その中央ホールの奥に位置する透明なガラスの間仕切壁で仕切られた空間が同様にメタファーとして「アトリエ」と呼ばれ確立したと考えられる。

アトリエは、格子状の組子によるガラスの間仕切壁を通して、中の様子が一目でわかるようになっている。同様に園庭に面した北東の壁はガラスの格子窓で構成されている。窓際にはイーゼルが立てられ、自然光をよく取り入れながら活動できる。中央には机と椅子が置かれ、さまざまな探求活動が行われている。壁際の棚には多種多様な道具や素材が置かれ、壁には活動の記録であるドキュメンテーションが展示されている。

こうしてアトリエの空間が形成され、アトリエは子どもたちが自由にアクセスし活動できる空間となっただけでなく、教師や親たちが子どもの活動の過程を一目見て理解できるような場所となった。アトリエの活動が本格化すると、物や機材、活動記録ドキュメンテーションが蓄積され空間におさまりきらなくなるという現実的な課題も生じた²⁵。これが、次の構想であるミニ・アトリエの導入につながっていく。

2-3. ミニ・アトリエの導入と各教室の三分割

開校から数年後、ディアーナ幼児学校で火災が発生し、アトリエが完全に焼失、新しい仕切り壁や家具、初期の作品アーカイブもすべて失われた。修復と部分的な再建が必要となり、その際に教室の拡張工事が行われた。

現在の校舎はこの再建時に東側へ5メートル拡張され、ゾーニの計画により拡張された4歳児と5歳児の教室には細分化された2つのセクションが設けられた。この設計には、1971

年に開校したヴィレッタ幼児学校での研究が参考にされた。L字型の平面で教室を配置することが、教師や子どもたちのグループ活動に適しているという調査結果が反映されている。つまり、部屋の一部を視覚的に見えるようにし、不透明な壁で部分的に仕切ることで視覚的干渉が少なくなり、作業に集中できるというものだった。この発見を活かし、ディアーナ幼児学校の改装時には、各教室を三つの空間に分割し、L字型の平面が採用された。メインの教室のほか、以前から構想されていたミニ・アトリエ、さらに視覚的・音響的に閉ざされた第三の空間が設けられた（図5）。

5歳児クラスの教室を例に挙げると、一つ目の空間は一般的な教室、拡張部分の空間のうち一つはミニ・アトリエとして、透明なガラス壁で仕切られ、音響的には分離されるが視覚的には開かれている。もう一つの部屋は不透明な壁で仕切られ、音響的にも視覚的にも分離された空間となった。レッジョ・エミリア

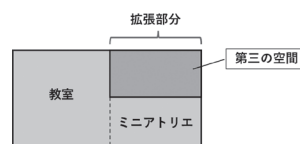


図5 L字型フロアプランの採用と三つの空間

の教育空間は、一見するとガラス壁によるオープンな内部空間に見えるが、実際には子どもたちの活動をきめ細かく見守り記録するため、空間を細分化することが重視されている²⁶。

ディアーナ幼児学校をはじめとした幼児教育施設の空間デザインにかかわってきたヴィーニは、レッジョ・エミリアの幼児教育と建築がどのように共に進化してきたかについて以下のように述べている。

良い建築デザインを作るためには、建物の構造だけでなく、光、音、色、素材など、空間に居住する環境の質も考慮する必要があると常々思っている。これらの要素はすべて建築の一部であるべきである。居住空間の「ソフト面の質」について話すのは今では簡単だが、1989年にこの種のプロジェクト²⁷に取り組み始めた頃はそれほど一般的ではなかった。レッジョ・エミリアは学校建築の量に満足することはなく、1つの学校が完成すると、その学校が提供できる生活の質をすぐに検討し始めた。建物を設計するときは、提案する空間で人々がどのように感じるか、どのように動き回るか、その空間をどのように使いこなすかについて常に考えている。²⁸

ヴィーニが述べているように、レッジョ・エミリアの幼児教育における学校の空間デザインは、校舎が完成して終わりではなく、そこで生活する人々の環境の質を検討し、より良い空間となるように絶えず変化している。1970年代以降、市内の幼児学校や乳幼児学校の需要が高まり、校舎が次々と増えていく中で、こうした生活の質の検討が相互作用的に行われてきた。そして1989年からはミケーレ・ヴィーニを中心にドムス・アカデミーとの共同プロ

ジェクト「メタプロジェクト」が開始され、光・音・色・素材などの多様な観点からの教育空間の質の調査が行われた。この教育空間の調査がその後の新築校舎の内部空間の構成につながっていく。

3. ニルデ・イオッティ乳幼児学校の内部空間の展開

3-1. ニルデ・イオッティ乳幼児学校について

ニルデ・イオッティ乳幼児学校は2003年に開校したレッジョ・エミリア市で最も新しい幼児教育施設であり、郊外の住宅地の学校不足のニーズに応える形で建設された。校名は、同市出身でイタリア共和国憲法の起草にも携わった女性政治家ニルデ・イオッティにちなんでいる。建築設計はトゥッリオ・



図6 ニルデ・イオッティ乳幼児学校の外観

ヴィーニが担当し、0～6歳の一貫教育を特徴とする施設となった（図6）。

全校生徒は約120人、クラスは5つで、0～3歳の3クラスは市が運営し、3～5歳児の2クラスは親の協働組織「アゴラ」によって自主運営されている。校舎内では市営セクションとアゴラ運営セクションが左右に分かれ、年齢や運営主体を越えて連続的な教育環境が実現されている。また、本来0～3歳対象の学校には配属されていなかったアトリエリスタがこの一貫校では幼児学校との兼任として常駐している。建築面では、長さと方向性のある広場（ピアッツァ）、二階建、天窓のある温室、仕切り壁のないミニ・アトリエなど、多様な空間が組み合わされている。

3-2. 内部空間の特徴と各部屋の位置

イオッティ校は、ディアーナ校が平屋であったのに対し、二階建を採用している。中央のピアッツァを軸にして、北側と南側に教室や諸室が左右対称に配置され、各クラスがそれぞれの空間にアクセスしやすい構造となっている。一階には1歳児・2歳児クラスと3～5歳児クラスの教室が配され、0歳児クラスは二階に置かれている。

校舎の中心に配置されたピアッツァは、長く伸びた形状と高い天井を持ち、人々が集まる交流の場、活動記録ドキュメンテーションの展示、食事やイベントなど多用途に用いられる空間となっている。木材やレンガなど多様な素材や色彩が使われ、カラフルで温かみのある雰囲気が特徴である。

アトリエは校舎の中心部に設けられており、ピアッツァからアトリエを通して園庭に直接出られる動線が確保されている。ただし、校舎全体の規模から見るとアトリエの面積自体は

比較的小さくなっている（図7）。ここでのアトリエは展示や待合のスペースとして使われる傾向が強まっており、子どもたちの探求活動の中核としての位置づけは薄れている²⁹。

二階には、二つの建設物をつなぐブリッジがあり、ここからピアッツァ全体や屋外の様子を見渡すことができ、子どもたちが多角的な視点から空間を捉えるのに役立つ（図8）。

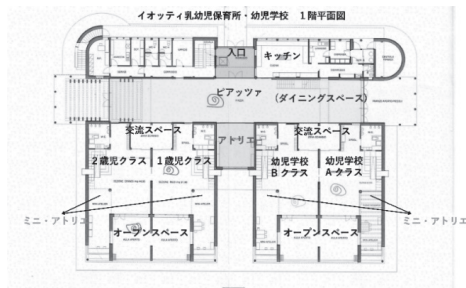


図7 ニルデ・イオッティ乳幼児学校の1階平面図



図8 ピアッツァの様子

3-3. アトリエ，ミニ・アトリエをはじめとした各スペースの状況

各クラスには、仕切り壁のないオープンなミニ・アトリエが隣接して設置されており、ここには主に人工素材やデジタル器具が自由に使える形で配置されている。照明を落とした状態でライトテーブルが利用されるなど、感覚的・実験的な活動が重視されている。ミニ・アトリエや教室の天井はピアッツァより低く、幼い子どもたちにとって安心できる居場所となっている（図9）。



図9 ミニ・アトリエの様子

また、「温室」³⁰とも呼ばれるオープン・スペースが新たに設けられており、吹き抜けの高い天井と園庭に面した大きなガラス窓が特徴的である。ここでは自然光がふんだんに取り込まれ、木材や自然物の素材が床や棚に並べられ、それらを使った活動の痕跡が残されている。窓際にはイーゼルも設置され、外光を浴びながら自由に絵を描くことができる（図10）。

こうした多様な空間構成は、子どもたちの創造性や探究心を刺激するだけでなく、0～6歳という幅広い年齢層の子どもたちが、発達段階や興味に応じて自発的に活動できる柔軟な環境を実現している。



図10 オープン・スペースの様子

4. 二つの事例に見る教育空間の継承

4-1. アトリエの位置の比較

ディアーナ幼児学校とニルデ・イオッティ乳幼児学校は、いずれも建築家トゥッリオ・

ヴィーニが設計に関与しており、内部空間の構成に一定の類似性、連続性が見られる。しかし、両校の空間構成には顕著な相違も存在する。ディアーナ校が平屋の既存建物を改修したりノバージョンであったのに対し、イオッティ校は新築で計画され、より大規模かつ多様な空間を実現している。

まずアトリエの位置を比較すると、ディアーナ校ではアトリエは校舎北東端、園庭に面した奥の空間に配置されていた（図4）。エントランスからピアッツァ、そしてアトリエが一直線に並ぶ構成は、訪れる人々を自然と芸術活動の場へと誘導する動線となっていた。一方、イオッティ校ではアトリエは校舎の中心部に移され、ピアッツァの大きな広がりを中心に、入口からアトリエを結ぶ動線とピアッツァの水平軸が十字を描く複合的な構造となっている。どちらも入口から内部の様子が見通せる設計となっており、空間全体へのアクセシビリティが重視されている点は共通している（図11）。

また、イオッティ校では一階の各学年の教室ごとに、アトリエと同等の役割を持つオープン・スペースが設けられている。これにより、創作活動の場が校舎全体に分散し、年齢や発達段階に応じた多様な表現活動が可能となっている。さらに、アトリエ活動に欠かせない素材の収集や研究を、外部の教育関連施設であるリサイクルセンター「レミダ」が担うようになり、地域との連携も強化されている。加えて、長年にわたって蓄積された活動記録ドキュメンテーションは、ローリス・マラグッツィ国際センター内に新設されたドキュメンテーション・センターで体系的に保管・活用される体制が整えられた³¹。

こうした新たな仕組みは、アトリエが特別な空間から校舎全体、さらには地域社会とつながるネットワーク的な空間・システムへと発展していることを示している。ディアーナ校のアトリエが活動の中心であったのに対し、イオッティ校ではアトリエの象徴性がさらに高まりつつ、具体的な活動や素材、記録の管理がより広範な枠組みで展開されている。

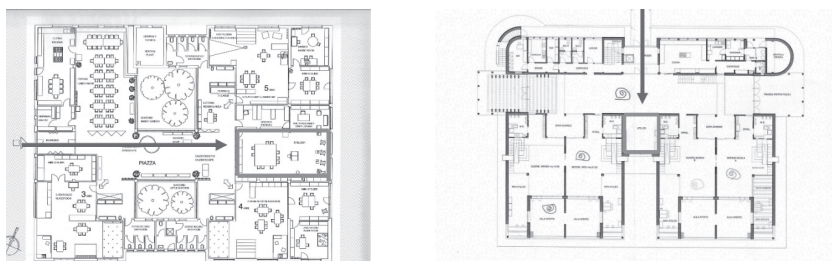


図11 ディアーナのアトリエの位置（左）とイオッティのアトリエの位置（右）

4-2. クラスルームの空間構成の比較

ディアーナ幼児学校とニルデ・イオッティ乳幼児学校は、いずれも各クラスの教室を三つの異なるエリアに分節する設計を採用しているが、その実現方法と空間の使用法には大きな

違いが見られる。

ディアーナ校では、各クラスルームが透明なガラス壁と不透明な壁で仕切られ、メインルーム、ミニ・アトリエ、静かな作業や小グループ活動用の空間という三分割構成となっていた。ガラスの間仕切壁を用いた可視性の高さは、子どもの活動や教師の観察を容易にし、各スペースの役割分担が明確であった。天井高や採光も均一で、どのエリアも同等の居心地を持つ連続的な空間として設計されていた点が特徴である。

一方、イオッティ校では、メインルームに仕切り壁を設けずミニ・アトリエと連続させ、さらに透明なガラスの開口部に囲われた温室（オープン・スペース）を加えることで、空間同士の境界があいまいとなっている。ミニ・アトリエとオープン・スペースの間には部分的に不透明な壁があるが、完全に区切られてはいないため、子どもたちは自由に行き来し、複数の活動を同時進行で体験できる。完全なL字型ではないものの、オープンな空間とクローズな空間、低い天井と吹き抜けの高天井が組み合わせられることで、多様なスケール感や居場所感が生み出されている。

この違いは、空間を明確に分節し用途を区切るディアーナ校の設計思想から、空間を流動的につなぎ、子どもの自由な活動のために開かれた場とするイオッティ校の発想へと変化していることを示している。

4-3. イオッティにおける新たな試み

イオッティ校の内部空間の新たな試みは、0歳から3歳の乳幼児に対しても3歳～6歳の幼児学校の子どもたちと同じような学びの環境を与えたことである。イオッティ以前の乳幼児保育所では、小さなスペースで安全に子どもたちを保育するのが一般的だった³²。しかし、イオッティの校舎が乳幼児保育所と幼児学校を併設した大規模なものとして建設されたことで、1歳児クラスや2歳児クラスより小さな子どもたちも幼児学校の子どもたちと同じく、様々なタイプのスペースによって構成された部屋で生活できるようになった。また、さらに小さい0歳児クラスは二階の北西に配置された。ほかのクラスとは教室の形が異なるものの、メインルームとミニ・アトリエ、大きなガラス窓によるオープン・スペースによって構成されている。レッジョ・エミリアの幼児教育と学校建築に長年関わってきた教育主事（ペダゴジスタ）のパオラ・カヴァッツォーニは、以下のように新しい校舎の取り組みについて評価している。

子どもたちを限られた空間に閉じ込めておくことは、確かに管理を容易にするが、おそらくそれは子どもたちの気づきや疑問を生み出す余地を減少させるかもしれない。複数の視点から物事を見ることは、挑発であると同時にメタファーでもある。イオッティ乳

幼児学校では、非常に小さな子どもたちが高さのある空間を素晴らしい方法で体験し、好奇心を持って接し、また彼らの一部は慎重に接するということが見られた。これにより、子どもたちと教師との関係性も異なるものになったと思う。³³

水平方向に伸びた天井の高い広場「ピアッツァ」や多様な空間は、3歳未満の小さな子どもたちは安全な小さな空間で守られるべきだという固定観念を覆し、子どもたちに流動的で多用途な空間を提供した。カヴァッツォーニが述べるように、すべての年齢の子どもたちに共通して複数の視点を与える空間は、子どものさまざまな反応を引き出し、子どもと教師の関係性をも変化させた。イオッティ校においてアトリエの空間は小規模化し従来の役割は薄れているが、教育空間全体が多様な素材として校内で過ごす人々に働きかけるという点で、アトリエという教育理念を引き継いでいるといえる。

おわりに

本研究では、1970年開校のディアーナ幼児学校と2003年開校のニルデ・イオッティ乳幼児学校をレッジョ・エミリアの幼児教育における教育空間の重要な事例として取り上げ、アトリエを中心とした内部空間の構成を検討した。

ディアーナ幼児学校で確立された「アトリエ」「ピアッツァ」「ミニ・アトリエを含む三分割の教室構成」は、レッジョ・エミリア・アプローチの「空間は第三の教師」という考えを具体化し、子どもの創造性や探究活動を支える学びの場として空間が設計されてきた。ニルデ・イオッティ乳幼児学校においては、この構成が継承・発展され、校舎規模の拡大や空間の象徴性の強化、さらに0歳から6歳までを対象とした新たな空間のあり方が試みられている。とくに、アトリエの機能が分散し、学校の中核に位置した象徴的な場所となったことは、アトリエが特別な空間から教育全体に内在する理念へと変化したことを示している。

これら二つの事例を通じて、レッジョ・エミリアの幼児教育におけるアトリエ空間が、1970年代に形成された校舎内部のモデルから、2000年代にはさらに多様な空間へと展開し、校舎全体に継承されていることが明らかとなった。

註

- 1 Lella Gandini, "The Atelier: A Conversation with Veà Vecchi," in *The Hundred Languages of Children*, ed. Carolyn Edwards, Lella Gandini, and George Forman, 3rd ed. (New York: Praeger, 2012), 304.
- 2 Carolyn Edwards, Lella Gandini, and George Forman, eds., *The Hundred Languages of Children*, 3rd ed. (New York: Praeger, 2012), 339.

- 3 Guiomar Martín Domínguez, “The Beauty of the Unusual: An Architectural Inquiry into the Reggio Emilia Approach,” *Interchange* 55, no. 1 (2024): 383–403.
- 4 乳幼児保育所はイタリア語で *asilo nido* と表記される。また、幼稚園は従来イタリア語で “*scuola materna* (母の学校)” と呼ばれ、母性が重んじられてきた。レッジョ・エミリアではこれと区別するために “*scuole dell’infanzia* (幼児学校)” の名称を新しく用いた。
- 5 レッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校の現状については、「レッジョ・エミリア市幼児教育施設公式サイト」, <https://www.scuolenidi.re.it/> (最終閲覧日: 2025 年 6 月 13 日) 参照。
- 6 プロジェッタツィオーネ (*progettazione*) は「計画」「設計」を意味し、あらかじめ定義されたカリキュラムやプログラムを意味するプログラマツィオーネ (*programazione*) とは区別されている。
- 7 さまざまな種類の素材を用いた教育は、20 世紀半ばまでイタリアの幼児教育で主流だったアガツィ法からの影響と、戦後イタリア美術で顕著にみられた物質性を重んじた表現方法の影響が考えられる。美学会西部会第 352 回研究発表会要旨、西影めぐみ「レッジョ・エミリアの幼児教育における「素材」の意味」『美学』第 266 号 (美術出版社, 2025), 100. 参照。
- 8 アトリエリスタ *atelierista* は絵画、彫刻、デザイン、音楽、テキスタイルなど様々な芸術分野の専門的教育経験を有しており、各校舎のアトリエの状況もアトリエリスタの性質により変化する。
- 9 レッジョ・エミリア市では 1913~1938 年に市立のフレーベル式幼児学校が設立されていた。
- 10 ローリス・マラグッツィの詩 “*Invece il cento c’è* (それでも百はある)” には、従来の学校教育が子どもの百の言葉 (多様な考え方や可能性) から九十九を奪ってきたとし、子どもの多様な表現言語を学ぶ権利を守らなければならないという意味が示されている。
- 11 Vea Vecchi, *Art and Creativity in Reggio Emilia: Exploring the Role and Potential of Ateliers in Early Childhood Education* (London: Routledge, 2010) シリーズ編者による序文参照。
- 12 「レッジョ・エミリアの幼児教育におけるアトリエの役割 — 1960 年代から 70 年代にかけて」『フィロカリア』第 42 号 (大阪大学大学院人文学研究科芸術学専攻, 2025), 1–18.
- 13 Adriano Canovi, “La schola come luogo di relazione: un repertorio orale,” in *Una storia presente: L’esperienza delle scuole comunali dell’infanzia a Reggio Emilia*, ed. Ornella Lorenzi, Ester Borghi, and Adriano Canovi (Reggio Emilia: corsiero editore, 2001), 161–168.
- 14 三浦篤『西洋美術の歴史 7 19 世紀』第 4 章 (東京: 中央公論新社, 2017), 404–405.
- 15 ヴェア・ヴェッキによれば「アトリエリスタ」という名称は男性教師の採用以降に常勤職として普及した。Vea Vecchi, *Art and Creativity in Reggio Emilia: Exploring the Role and Potential of Ateliers in Early Childhood Education* (London: Routledge, 2010), 113.
- 16 学校の名称や数については, Reggio Children, ed., *Una Città, Tanti Bambini: Memorie di una storia presente* (Reggio Emilia: Reggio Children, 2010) 参照。
- 17 Ibid., 166. 1991 年のアメリカのニューズウィーク誌に世界で最も先進的な 10 校の一つとして掲載され、そこからレッジョ・エミリアの幼児教育が世界に知られることになった。
- 18 Vea Vecchi, *Art and Creativity in Reggio Emilia: Exploring the Role and Potential of Ateliers in Early Childhood Education* (London: Routledge, 2010), 83.
- 19 Ibid., 83. 実際、マラグッツィとゾイーニは 1967 年にモデナで開催されたラディカル・デザインにかんする展覧会で出会っており、両者ともラディカル・デザインとの関わりを持っていた。
- 20 高橋節子「子どものための物理的環境とは何か — モンテッソーリ教育の場合 —」『人間環境学研究』13 巻 1 号 (2015): 21–36.
- 21 Emilio Ambasz, *The New Domestic Landscape: Achievements and Problems of Italian Design* (New

- York: New York Graphic Society Books, 1972). スーパースタジオの作品例を参照。
- 22 Vecchi, *Art and Creativity in Reggio Emilia*, 83–84.
- 23 建築家「ミッロ」に関する記録は断片的で詳細不明。
- 24 Vecchi, *Art and Creativity in Reggio Emilia*, 84.
- 25 マラグッツィはアトリエの空間について、「私たちの道具箱は大きくなった。アトリエはより小さな空間に分散させる必要があった。」と語っている。Loris Malaguzzi, “Se l’ atelier e’ dentro una storia lunga e ad un progetto educativo” *Bambini*, (1988):29.
- 26 ミニ・アトリエ導入の経緯と教育空間の細分化にかんしては Vecchi, *Art and Creativity in Reggio Emilia* を参照した。
- 27 ミケーレ・ヅィーニのプロジェクトの成果は Giulio Ceppi and Michele Zini, *Children, Spaces, Relations: Metaproject for an Environment for Young Children* (Reggio Emilia: Reggio Children, 1998) にまとめられている。
- 28 Vecchi, *Art and Creativity in Reggio Emilia*, 102–103.
- 29 著者が 2024 年 2 月にイオッティ乳幼児学校を見学した際、校舎のマップを見るまではそこがアトリエの空間であることに気づかないほどであったためこのように記述した。
- 30 イオッティ乳幼児学校のパンフレットに掲載されている平面図には、“Aula Aperto (オープンルーム)”と表記、学校建築にかんする説明書には“Giardino d’inverno (温室)”と表記されている。
- 31 リサイクルセンター「レミダ」は 1996 年、ローリス・マラグッツィ国際センターは 2006 年に設立された。
- 32 Vecchi, *Art and Creativity in Reggio Emilia*, 103.
- 33 Ibid., 103–104.

図版出典

- 図 1 2024 年 2 月著者撮影
- 図 2 Paola Strozzi and Vea Vecchi, eds., *Consigliaria* (Reggio Emilia: Reggio Children, 2002), no.11. ©Preschools and Infant-toddler Centers-Istituzione of the Municipality of Reggio Emilia (Italy)
- 図 3 Ibid., no.23. ©Preschools and Infant-toddler Centers-Istituzione of the Municipality of Reggio Emilia (Italy)
- 図 4 Ibid., 6. ©Preschools and Infant-toddler Centers-Istituzione of the Municipality of Reggio Emilia (Italy) (補足は著者による)
- 図 5 著者作成
- 図 6 http://www.tulliozini.it/prog/ark/ark_np/TZ_ark_np6.html (project by Tullio Zini Architetto)
- 図 7 ニルデ・イオッティ乳幼児学校パンフレット ©Preschools and Infant-toddler Centers-Istituzione of the Municipality of Reggio Emilia (Italy) (補足は著者による)
- 図 8 2024 年 2 月著者撮影
- 図 9 http://www.tulliozini.it/prog/ark/ark_np/TZ_ark_np6.html (project by Tullio Zini Architetto)
- 図 10 2024 年 2 月著者撮影
- 図 11 Strozzi and Vecchi, *Consigliaria*, 6 とニルデ・イオッティ乳幼児学校パンフレット (補足は著者による)

The Formation and Continuity of Atelier-Centered Educational Spaces within Early Childhood Education in Reggio Emilia

NISHIKAGE, Megumi

The Reggio Emilia Approach, developed in northern Italy, is internationally recognized for integrating artistic practices into early childhood education. Central to this pedagogy is the *atelier*, a creative space where children explore materials and ideas in collaboration with teachers and parents. This study investigates the formation and continuity of educational spaces centered on the *atelier* by analyzing two key cases: the Diana Preschool (opened in 1970) and the Nilde Iotti Infant–Toddler Center (opened in 2003). Drawing on the writings of Reggio educators and architectural analyses, the study clarifies how the spatial model established at Diana—comprising the *atelier*, *piazza*, and a tripartite classroom structure with *mini-ateliers*—embodied the principle that “space is the third teacher.” At Nilde Iotti, this model was expanded and transformed through a larger scale, more pronounced spatial symbolism, and new configurations for children aged 0–6. The simultaneous dispersion of *atelier* functions and the establishment of a centralized, symbolic core illustrate its evolution from a special creative room into a core embodiment of the educational philosophy itself. Through these two cases, the study shows how the *atelier* in Reggio Emilia evolved from a localized 1970s spatial model into a more diverse and integrated architectural system in the 2000s.